むろん、『友達』という定義ではくくれない者も、中にはいるだろう。だが、幸村の急な誘いに応じて集まってくれた者たちは、みな少なくとも幸村に好意を持って接してくれているように見える。性格的に合いそうもない元就ですら、わざわざ土産まで持ってきてくれたというのだから相当なものだ。

まぁ「貴様は理想の捨て駒よ」とか云って自軍に勧誘してくるのが果たして『友情』と云えるどうかは、多少疑問の余地があるが。

いずれにしろ今の幸村には、昔と違って一声掛ければいくらでも一緒に『遊んで』くれる友達が大勢いるのだ。それが、どういうわけか佐助にはちょっと寂しい。

（昔は、ぜーんぶ俺様の役目だったのにねぇ……）

そんな複雑な思いを胸の内に隠して、佐助はくるくると働き続けていたのだが……。

ふと気付けば、酔っ払いの半分ほどが床で潰れたまま眠ってしまい、残った者たちも銘々に手酌で飲み続けたり、あてがわれた客室に引き上げたりしてしまっている。やっとお開きかとため息をついた佐助の元に、ほろ酔い気分でご機嫌らしい幸村が近付いてきた。

「佐助！　此度は色々と大儀であったな！　……どうだ？　俺にとてちゃんと友はおるのだと、判ったであろう？」

揚げ句、得意満面またしてもふんぞり返るものだから、佐助はもう苦笑で返すしかない。

「はいはい、友達いないなんて云って、悪かったよ。旦那には、旦那のことが大好きなお友達が、たくさんいるよね」

そう云って謝りながらも、さっきから胸の内でもやもやしている気持ちをつい抑えきれなくなって、

「俺様も、これからは安心して忙しくしてられるね。旦那は、お友達のみんなと遊んでればいいもんね」

うっかり口を滑らせれば、幸村はさすがに「何だと!?」と気色ばむ。しかも、

「お前は、俺と仕事とどちらが大事なのだ!?」

とか素っ頓狂な方向へ怒りを爆発させ始めたので、佐助は呆れた。

「はぁ？　何でそうなるの？」

旦那こそ、お友達がこれだけいれば、俺様なんか必要ないでしょう？

つい口走れば、幸村は憤懣やるかたないといった表情で、

「何を申すか！　俺とてまことは、お前と二人きりでゆるりと過ごしたかったのだぞ!?　それをお前が忙しいと怒るものだから、仕方なく友を呼んで相手をしていただいたのではないか！　それなのにお前は、俺と過ごすより仕事をしていた方がよいと申すのか!?　むろん友と語らう時間は楽しいものであるが、俺とお前は……その……こ、恋仲であろう!?」

しかも顔を真っ赤にしながらそんなことを云い出すものだから、佐助もついつられて顔が熱くなる。

「は!?　ちょっとあんた、何云ってんの!?」

因みに真田忍び隊の面々の証言によると、

「長さまはそれ以来、出来るだけ仕事を溜めないよう、それはそれは血の滲むような努力をされて……」

だそうなので、結局は『犬も食わない』という奴だったのだろうと思われる。

《終わり》